

「江戸時代 所沢の医療につくした人々」

2023-03-10 記 清水とも子

- 実施日：2023-03-02(木) ■参加者：34名 ■生涯学習推進センター：多目的室
■講師：所沢市文化財保護課 木村立彦氏

江戸時代の人々にとって病は脅威でした。所沢の人々が病とどのように向き合ってきたのか、また、江戸時代後期には所沢地域にも医師として医療につくした人々も数多く現れ、名医と呼ばれた人々や医療を受けることができた人々について、木村立彦氏に講師をお願いして学びました。

テーマを3つに分けて講演を進めていただきました。

1. 疫病と疫病除け
2. 医療につくした人々
3. 医療を受けた人々



木村立彦氏による講座

1. 疫病と疫病除け

疫病とは、疱瘡(痘瘡、天然痘)、麻疹、赤痢、コレラ、風疹などである。人々はこれらの疫病に罹るのは祟りだと信じ、逆にそれらを祭り上げて疫病を鎮めようと考えた。また、子供が疫病に罹らないようにとの願いを込め、5月5日の端午の節句に5月人形や魔除けの幟を飾った。

疫病神である牛頭天王(天王様)を祭った祭礼が八雲神社、八坂神社などで疫病除けが行われた。

牛痘種痘が普及するまで天然痘は大変恐れられ、所沢市内では疱瘡神を祭った疱瘡神社や瘡守稲荷などがある。幕末の江戸でコレラが大流行し、江戸の死者は3万人とも4万人とも言われている。

また、文久2年(1862)には麻疹が大流行し、江戸の死者は1万4,000人余に及んだという。

2. 医療につくした人々

神谷玄甫 新田村を中心に医療活動をした。

若山健海 神谷新田出身。宮崎県で開業し当時まだ入ってきたばかりの種痘を人々に広めた。
歌人若山牧水の祖父である。

菊川儀角 久米村の医師。久米村出身の医師平塚宗順の9代目を継ぐ

平塚宗順 久米村の医師。菊川儀角の後を継ぎ同家の婿となり10代目を継ぐ。

平塚宗順 久米村の医師。他家から平塚家11代目を継ぐ。名医の誉れ高く村の医療につくすと共に研究心旺盛な医学者であった。

玄注 久米村の医師。八王子千人同心の子で、農業と千人同心勤めのかたわら医術を修行する。10数年余り村の医療につくした。

鈴木一貫 糀谷村の医師。三ヶ嶋流眼科を大成し、治療活動のみならず貧民救済のための医療にもつくした。三ヶ嶋流眼科は「明治前日本医学史」に江戸時代の眼科諸流派の一つにあげられている。

三嶋館赤門 糀谷村の鈴木家の俗称。赤門は将軍家から許可を得たものとされている。

大明堂黒門 赤門の鈴木家と祖が同じ医家で眼科治療活動をした。門は通常のものであったが赤門に対して黒門と呼ばれた。



療養御頼り申手形之事



平塚家長屋門
(所沢郷土美術館。国登録有形文化財)



赤門
(羽村市郷土博物館)



黒門
(入間市宮寺 西勝院)

3. 医療を受けた人々

- ・氷川村(所沢市山口)の石山家は神事舞太夫という祈祷師の家で、病氣平癒や疫病退散の祈祷を行っていた。一方で家族や当主自身の病に対しては医療に頼っていたことが同家の支出簿「諸事覚之帳」と題した帳簿から解った。帳簿は幕末から明治にかけて残されており、医師への支払いや薬札、薬の購入が記されていた。石山家には野口村(東村山市)渡辺崇仲が往診しており、患者の病状の診断・薬の処方を行っていた。
- ・文化9年「療養御頼り申手形の事」(写真参照)が残されている。内容は大月出身の25歳の仁左衛門が奉公中に眼病に罹ってしまったが、治療費がなく困っているので無料療治を糎谷村の鈴木道運に願っているもので、大きな手形からは病人の切実さが伝わってくる。
江戸時代の人々にとって病は恐ろしく、医師に頼るだけではなく神仏にもすがらざるを得なかったが、江戸時代後期になると在村医師も数多く現れ地域の医療につくした。
- ・木村立彦講師の歴史講座は今回で9回目となり当サークルの主要な講座になっています。
毎回、所沢の歴史を楽しく学ばせていただいています。

担当 Dグループ

青木、猪木、安田、粕谷、喜多、平野、栗屋、小倉、清水